

将宝みつけた!

県立博物館学芸員の視点

②

瓦

考古担当 島田 佐智夫

今月30日まで開催中の県立博物館開館40周年記念特別企画展「鑑賞と上と下野薬師寺」は、おかげさまで連日多くの観覧者でにぎわっています。私は考古担当として、発掘された瓦などの展示に関わってきました。瓦と聞くと、地味な印象があるかもしれませんが、見方が分かれると面白くなつてきます。

古代のお寺や役所の軒先を飾った瓦には、「軒丸瓦」と「軒平瓦」があり、それぞれ



八尾市立埋蔵文化財調査センター（大阪府）で瓦を調べる筆者（奥）

傷が物語る古代3寺の旅

様の部分に線として表れるようになります。同じ文様の瓦でも傷が多く広がっていたりするほど、後になって作られた瓦だと分かります。

また、軒平瓦の下の部分（凸部）には額と呼ばれる部分があるのですが、ここに段差があれば奈良時代の古い時期、なだらかなものは新しい時期のものということも分かっています。

今展の主題である下野薬師寺は、8世紀前半に改築されて官寺と呼ばれる国のお寺になりました。このときの瓦の型は、奈良の興福寺をモデルに制作されたと考えられているのですが、下野薬師寺で使われたこの瓦の型は、再び興福寺に戻って使われ、さらに兵庫県にある溝口廃寺跡から出土した瓦を作る際にも使われたことが明らかになっています。

このストーリーは、三つの寺の瓦の文様に残された線や額の形などを地道に比べることから導かれる推理で、まさに「歴史探偵」です。

もともと瓦の型は瓦職人が持ち運んでいたようで、下野薬師寺の改築のために奈良からやって来た瓦職人がまた奈良に戻ったこと、さらに職人が奈良から兵庫県に移動したことが想像できます。一見地味な瓦ですが、古代、数百年の旅から生まれたものだということ想像しながら、じっくり見てください。

この特別展で、展示室に資料が並ぶまで、私たち学芸員は、何度も調査や借用のために栃木と関西を行き来しました。それは、瓦職人が瓦の型を携えて畿内と下野を行き来した姿と少し似ているかもしれません。

（次回は23日に掲載）



島田佐智夫さん

しまだ・さちお 人文課
主任研究員▼考古担当▼佐

野市出身▼ひとこと 今回の特別企画展で展示している大宰府式鬼瓦と初めて対面した時、九州独特の彫りの深い豊かな表情に驚きと感動を覚えました。実物が放つ力強さをぜひ展示室で感じ取ってください。